

# 清乾隆時代における 北京の宣武地域の宗教施設の分布と歴史地理考察 —『乾隆京城全図』の分析から—

張 旭\*

## 摘要

宗教は人類の思想上の信仰であり、精神的な文化である<sup>1)</sup>。人々の生活に対する願いと憧れが長年を経て多様な信仰になり、最後に宗教になった。いわゆる宗教は、人々の希望を託す無形の精神文化である。それに対して、仏経、經典、仏像、神像などを除いて、各地に建てられる寺、祠、社、観、廟、教会は宗教を具現化する有形な文化と言える<sup>2)</sup>。そのため、宗教施設は、単なる信仰を託す場所のみならず、都市や地域の歴史、文化を後世に伝えるための大切な施設と言っても過言ではない。本論では中国北京宣武地域の宗教施設の分布と景観を『乾隆京城全図』を用いて分析したい。

キーワード：北京、宣武地域、宗教施設、分布、都市景観、『乾隆京城全図』

## I 変わりゆく中国の都市風景と宗教施設

一口に宗教施設といっても、人々の頭の中に思い浮かぶ印象はそれぞれ違うだろう。欧米人は教会、アラビア人は礼拝堂（モスク）。東アジア・東南アジアの人々は寺院、観、神社である。どのような宗教施設であろうと、いずれも人々の信仰を託す場所である。人々は宗教施設を利用し、宗教儀式を通じ、心を浄化している。そして、国家は宗教というフィルターを通して民意を掴み、民衆を正しい道へと導く。そうした点から、宗教及び宗教施設は社会を安定させる役割を果たしている。また、現在の宗教施設は、宗教信仰、祭祀的機能はごく一部であり、大部分は国、都市、地域の歴史と文化を後世に伝えるための重要な施設となっている。歴史的景観の保全と有形文化財の保護という観点から、国や地方政府（自治体）から重視されている。そのため、宗教施設に関する諸研究は益々重要になってきている。

特にアジアでは、主に仏教、道教、神道、イスラム教、キリスト教などの宗教が多様な分布をしている。そして宗教施設は各国に広がっていく際に、各地のローカルな文化要素と融合しながら多様な造形が誕生していった。同じ宗教であっても、外観が異なる例も多い。

仏教は古代インドに発祥し、陸のシルクロードを経て中国に入った。これが大乘仏教である。さらに、中国からは、朝鮮半島を経て6世紀中頃に日本に伝来した。また、中国沿海部から船で

\*北京第二外国語大学日本語学院講師 E-mail: beijingabyss@163.com

海を渡り東南アジアとりわけベトナムにも伝わっていった。仏教と仏教建築は長年の伝播、地元文化の受容と融合を伴ってきた。現在のインド、東南アジア諸国、中国、朝鮮、日本ではそれぞれが仏教に対する異なる理解をし、自然環境、建築理念の差異によって様々な独自の文化を持つ仏教建築様式が創造されてきた。

中国の場合は、合院住宅の影響によって寺院建築は合院式へと変容した。一方、タイの仏教建築は金色の漆塗りの塔が雲に向かって聳えている。中国の文化に多大な影響を受けた朝鮮と日本でも、仏教建築における細部の様式によってそれぞれの民族の文化要素をかなり融合させている。朝鮮半島は石材が豊富ため、寺院建築の基盤は石が積み重ねられている。日本の寺院建築は中国の唐・宋の建築様式を保持しているが、屋根に鬼瓦と唐破風の要素を付加している。さらに、現在の日本では新築の寺院の様式は更に新しい要素を加えている。琉球王国の王城の地にある首里城の主殿は仏教建築ではないが、地理的要素の影響によって建築様式が変容している。主殿の鮮やかな色彩は中国の伝統的な宮殿建築と同じである。しかし屋根には、日本の建築様式の唐破風が用いられている。日本と中国の間に位置している琉球王国は、昔から両国の文化を吸収してきたが、その融合によって独自の建築様式を生み出してきたといえよう。

仏教建築のみならずそれぞれ異なる様式を持つ宗教施設は、各都市内部に独特の景観と醸し出してきた。これは現代の都市景観を区別する際にも、著しいメルクマールのひとつとなっている。

しかし、現代社会では都市人口の激増に伴い、さまざまな問題が都市内部で見られる。特に2000年以降の中国では、急速な経済発展により都市人口が急増したため、都市の規模拡大と衛星都市の建設が喫緊の課題となっている。そのために政府は、都市改造、インフラ整備に力を注いだ。市街地も広い道路を通し、旧市街地を合併し、そそりたつ高層ビルを続々と建て続けた。都市景観は驚くほど大きく変化している。

市井からはさみや包丁磨きなどの商売をする呼び売りの姿が消え、食後に庭や胡同の道端で中国式の将棋、トランプをする光景も徐々に消失している。これらは人々に刻まれている美しい記憶に過ぎなくなった。古い寺院がなくなり、その代わりに聳立つショッピングモールが出現している。高大な城壁が撤去され、四方八方に通じる立体交差橋が建設された。静寂な胡同の雰囲気は消失し、車の往来が激しいアスファルト道路になった。四合院がなくなり、一晩中イルミネーションが輝いているにぎやかな繁華街になった。夜の市街地での暮らしぶりは現代都市の象徴である。

しかし、現代都市の独自性を保持するためには現代の個性的な高層ビル以外に、数少ない歴史的建築を保護すべきだと考えられる。そのために、歴史的建築の保存と保護は喫緊の課題となっている。とりわけ宗教施設はその代表的建築のひとつであり、そのいくつかは保存措置が必要となっている。宗教施設にかかわる諸問題の解決は、都市計画の合理性、市街地改造、都市景観の形成にとって無視できないものと考えられる。

## II 宣武地域の宗教施設の分布

北京の宣武地域は現在の北京の中心市街地の南西に位置している。昔は「宣南地区」とも呼ばれている。周知のように現在の北京の中心市街地の範囲は図1に示したように清代の北京城の範囲に相当する。宣武地域は明清時代の「外城」にあり、金の南京城と元の大都の外城の部分カバーしている地域範囲が明確されている。そして、金、元、明、清の都市景観や遺構が宣武地域に残られることが明らかになっていた。宣武地域の都市景観の形成に与える影響を明瞭するために、本稿は『乾隆京城全図』（略称『乾隆図』）から筆者が作成したデータベースを使い、清の北京城の外城にある宣武地域の宗教施設の分布と規則性を明らかにし、いくつかの知見を述べる。

分析の方法としては、『乾隆図』の宗教施設の分布的特徴を分析し、その差異と形成の要因を明らかにする。本稿では宣武地域のみをあつかう。

まず、『乾隆図』に記載されている宗教施設の名称、位置、種類、面積のデータを集計し、一覧表を作成する。次に『乾隆図』の宗教別の施設位置の分布図を現在の地図上に落として分布パターンを分析する。そして清代の北京城の外城にある宣武地域の仏教寺院、庵、民間信仰廟祠、道教観、儒教廟、イスラム教の清真寺の分布の特徴を捉えることを試みる。

本稿は宣武地域の宗教施設の位置づけ、各種宗教施設の分布状況を図と表で説明する。最後に、分布状況の形成を促した理由の分析を試みる。

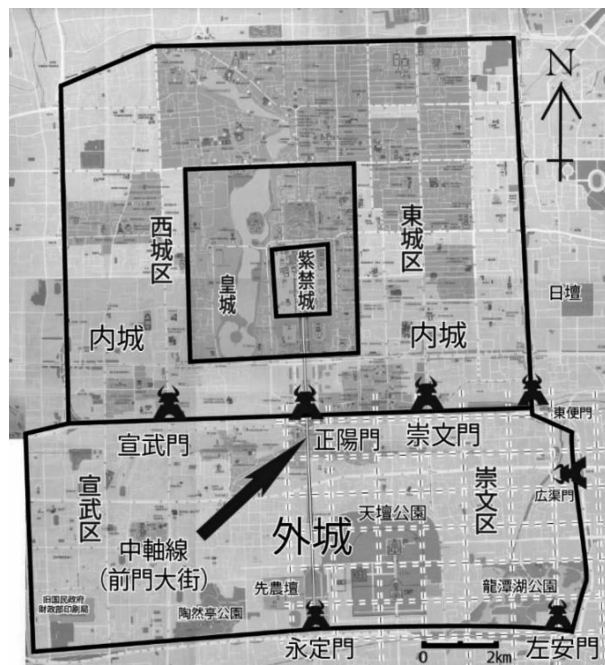


図1 清代北京城の範囲  
『北京古建築地図集』2009、に基づいて筆者加筆

## 1. 宣武地域の位置づけ

宣武地域は、図1のように、外城の西半分の地域に位置している。「宣武」という名称は外城の宣武門を指しているため、1949年に中華人民共和国が成立した後、この地域を宣武区と称するようになった。乾隆時代は清の国力が絶頂期に至っており、北京は首都として文化、経済においてトップに位置する都市であった。宣武地域には数多くの漢族の官僚や、商人の大型邸宅、地方の会館（各省の商会在北京に持つ出張所）が建てられ、当時の知識人、商人、科挙に参加する秀才が密集している地域であった。一般庶民向けの小型宗教施設が街中に散在していた。清代初期から中期までの間、内城には満州族が住んでいたため、外城の宣武地域の住民は漢人、イスラム人、回民、モンゴル人、朝鮮人など多くの民族が暮らしていた。そのため複数の宗教信仰が宣武地域に存在していた。図2が示しているように、宣武地域にある宗教施設の中にキリスト教の天主堂はなかった。乾隆時代、キリスト教は北京でまだ盛んになっていなかったため、天主堂は内城のみに建設されていた。当時の朝廷は西洋の技術の移入に重きを置いていたが、キリスト教と西洋人に対してまだ信用はしていなかった。特にキリスト教の布教活動は乾隆帝に嫌われており、各地で天主堂を建設することは禁止されていた。乾隆時代には内城のみキリスト教の天主堂建設が認められていた。これは、天主堂が紫禁城の付近に位置することで皇帝に面会を命じられた時に紫禁城まで短時間で到着することができるという利点があった。しかし最も重要な理由は朝廷が天主堂と布教師を監視することができるからである。

## 2. 当時の宣武地域の宗教施設の分布状況

『乾隆図』と『北京古建築地図集』を利用して清代乾隆中期の北京外城にある宣武地域の宗教施設の分布図（図2）を作成した。宣武地域は西から東へ6等分、南北に7等分して37エリアに分けられている。

次に、各種宗教施設についてエリアごとに述べる。

### 1) 寺院

各エリアにある寺（■）の数は図3に丸囲み番号で表している。仏教の寺（■）は宣武地域の中間部に分布している。特に広安門（V-13の1）から広安門内大街（V-13の2）、牛街（V-14の1）、宣武門西大街（V-13の3）まで、西便門（V-12の2）から、宣武門西大街（V-12の2）、長椿街（V-12の3）、宣武門外大街（V-12の4）、和平門（V-12の5）まで、菜市口大街（V-14の3）、宣武門大街（V-14の4）、珠市口西街（V-14の5）一帯、驛馬市大街、珠市口西大街（V-13の6、V-14の6）一帯に密集している。そして、宣武地域の西部、中部、北部（V-13の2、V-14の3、V-12の4）に大型寺院が立地する。また、宣武地域の東部にある驛馬市大街、珠市口西大街（V-13の6、V-14の6）と宣武門西大街（V-13の3）に中型寺院が並んでいる。他に、西城壁の藁林前街に沿って小型寺院が散在している。

分布状況を見ると寺院は37エリア中20エリアを占めている。占有率は54%と半分以上の地域をカバーしている。寺院のほとんどが中部、北部に位置している。特に宣武門西大街（V-13

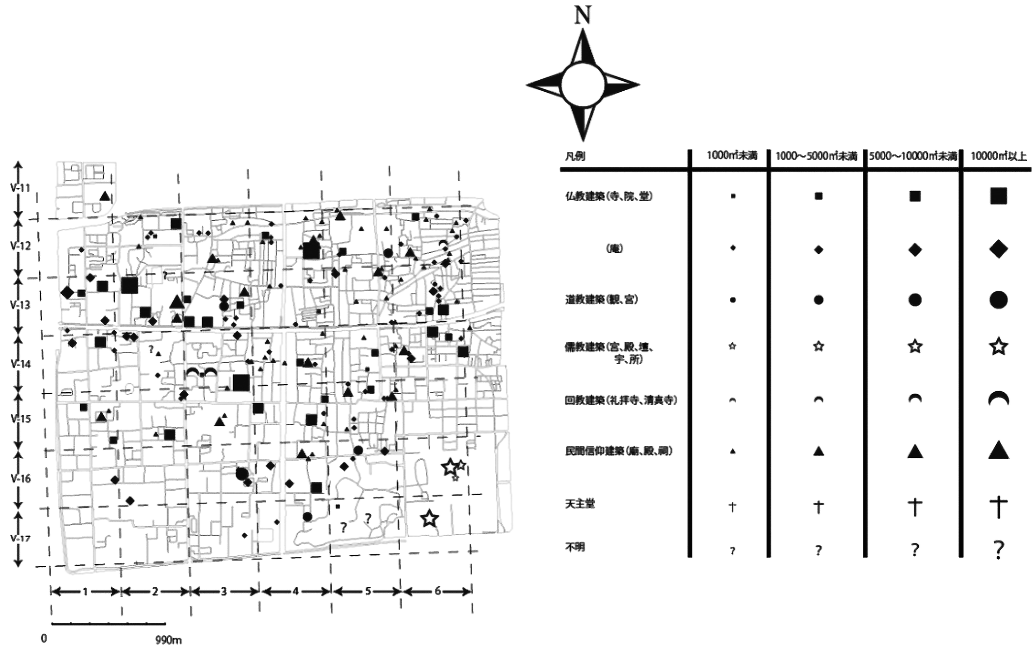


図2 宣武地域の宗教施設の分布状況  
(筆者作図)

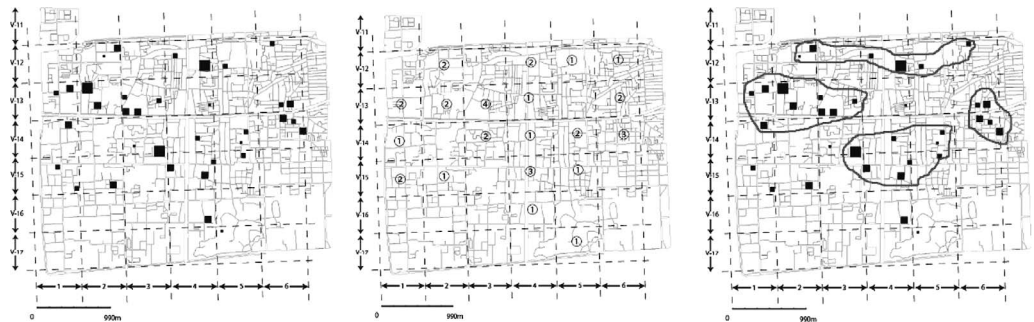


図3 宣武地域の寺の分布状況  
(筆者作図)

の3), 菜市口大街 (V-15 の4), 珠市口西大街 (V-14 の6) に寺院が多い。表1に示しているように V-12, V-13, V-14, V-15 のそれぞれの寺の総数は8軒, 8軒, 11軒, 8軒であり, 総面積は V-13 が 65,586㎡ と V-12 の 23,258㎡, V-14 の 49,961㎡, V-15 の 46,492㎡ を遙かに超えている。乾隆時代にはこの地域に大きな面積の仏教寺院が建てられており, 宣武地域の寺院の本拠地であったと考えられている。また, 東部の珠市口西大街に沿って中型寺院が建っている。この地は北京城の中軸線にある前門大街と珠市口大街の交差点にあり, 外城地域の東西南北の要衝であった。また, この地域は店舗が林立し, 商業が栄えた商人の往来が多い繁華街でもある。さらに, 地名の語源からは, ここは真珠を販売する市場である。客が集まり, 寺院への参拝客も多かった。そのため, これらの寺院は大街沿いに建ち並んでいる。古来中国の都市寺院の分布は常に商

業活動、市場と関連している。商業と祭祀活動が中国の都市では不可分に結びついている。

また、図3が示しているように北部の西便門 (V-12 の 2) から、宣武門西大街 (V-12 の 2)、長椿街 (V-12 の 3)、宣武門外大街 (V-12 の 4)、和平門 (V-12 の 5) までの一帯は内城の南城壁の南側に沿って寺院が分布している。外城ができていなかった頃、城壁付近に商人、百姓が集まり、自然に宅地が形成されていた。明代中期以降、人口の増加、防衛の増強のために外城壁が増築され、外城の市街地が誕生した。かつての城壁沿いだった一帯が最も賑やかな繁華街になった。こうした状況の中で寺院も建てられている。図3を参照するとこの一帯の敷地の地割が錯綜していることがわかる。狭い敷地は大型廟が建設できないため、中型寺院、小型寺院が多い。しかも胡同内に分布している。また、宣武地域の中部、広安門内大街の南側を見ると中型寺院、小型寺院が幹線道路に沿って分布している。特に広安門内大街 (V-14 の 3) から、宣武門外大街 (V-14 の 4) までに中型、小型寺院が集中する。その理由はここが宣武地域南部の中心市街地であるからと考えられる。住民が密集し、店舗も林立している。敷地の地割は幹線道路の北側に比べて少し広くように見える。さらに、宣武門外大街と菜市口大街の交差点は東西南北の要衝であるため、敷地の地割を見ると住民の密度が高いことがわかった。人口が密集しているこの交差点は、かつて罪人を処刑する場所であった。処刑場は怨念が深いため、寺院が数多く分布していると考えられている。

分布密度を見れば、V-13 の 3 が最も密度の高い地域である。2 番目は V-14 の 6、V-15 の 4 である。これらの地域はすべて東西南北の幹線道路の両側にある。また、広安門内大街から珠市口大街まで (V-13、V-14) の一帯に沿って多くの寺院が建てられている。表1に示しているように V-13 の寺院総数は 8 軒、V-14 の寺院総数は 11 軒である。図3を参照すると特に菜市口大街と宣武門外の交差点の東側 (V-13 の 6、V-14 の 6) の密度が高い。V-13 の寺院の総数は V-14 に比べて少ないが、総面積は広い。

なぜこの地域にこれほどの寺院が建設されたかに関しては幹線道路が東西を貫き、宣武地域の市街地の中心であることが大きい。また、崇文地域においても東西を貫いている幹線道路があるが、宣武地域の幹線道路と同じように両側に寺院が密集していると推測される。これは筆者が以前発表した論文「清朝乾隆時代北京崇文地区の宗教施設の分布と景観—『乾隆京城全図』の分析から—」<sup>3)</sup>の崇文地域の地図上での分布状況を分析するとき判断できるだろう。

図3を参照すると地域の寺院密度は以下の計算によってその状況が把握できる。

北部の範囲 5 エリア、寺院総数 6 軒、寺院密度  $6/5 = 1.2$  軒/エリア

西部の範囲 4 エリア、寺院総数 9 軒、寺院密度  $9/4 = 2.25$  軒/エリア

南部の範囲 5 エリア、寺院総数 8 軒、寺院密度  $8/5 = 1.6$  軒/エリア

東部の範囲 2 エリア、寺院総数 5 軒、寺院密度  $5/2 = 2.5$  軒/エリア

東部の寺院密度が最も高い。次は西部、南部の順で最後が北部である。寺院密度の計算によって宣武地域における寺院の分布の特徴は東部、西部、南部に密集しており、南部、北部の市街地は疎らに分布していることがわかる。幹線道路沿いに分布し、重要な交差点に密集している。

## 2) 庵

各エリアにある庵（◆）の数は図4に丸囲み番号で表している。仏教庵（◆）は宣武地域の北部に分布している。特に広安門（V-13の1）から広安門内大街（V-13の2）、牛街（V-14の1）、宣武門西大街（V-13の3）まで、西便門（V-12の2）から、宣武門西大街（V-12の2）、長椿街（V-12の3）、宣武門外大街（V-12の4）、和平門（V-12の5）まで、菜市口大街（V-14の3）、宣武門大街（V-14の4）、珠市口西街（V-14の5）一帯、和平門（V-12の6）から、驛馬市大街、珠市口西大街（V-13の6、V-14の6）、菜市口大街南側（V-15の5）一帯に密集している。そして、宣武地域の西部の広安門（V-13の1）に大型庵が建てられている。また、宣武地域の東部にある驛馬市大街、珠市口西大街（V-13の6、V-14の6）、西部にある広安門内大街（V-13の2）一帯、南部にある宣武門外大街（V-16の4）一帯に中型庵が建ち並んでいる。東部、中北部、西部、南部の胡同に小型庵が散在している。

分布状況を見ると庵は37エリア中27エリアを占めている。占有率は73%で4分の3未満の地域をカバーしている。庵のほとんどが東部、北部、西部に位置している。特に驛馬市大街（V-13の6）、牛街（V-14の1）、広安門内大街（V-13の3）に庵が密集している。表1が示しているようにV-12、V-13、V-14のそれぞれの庵総数は17軒、17軒、20軒であり、総面積はV-13が22,185m<sup>2</sup>とV-14の20,870m<sup>2</sup>やV-12の7,730m<sup>2</sup>を遥かに超えている。乾隆時代にはこの地域におおきな面積の庵が建てられており、宣武地域の庵の本拠地であったと考えられている。また、東部の珠市口西大街に沿って中型庵が建っている。前述のようにこの地は北京城の中軸線にある前門大街と珠市口大街の交差点にあり、外城地域の東西南北の要衝であった。この地域は店舗が林立し、商業が栄えた繁華街でもあり、商人の往来が多かった。さらに、地名を見ればわかるように、ここは真珠を販売する市場であった。客が集まり、寺院への参拝客も多かった。しかし、これらの庵は寺院と異なり胡同の敷地に建ち並んでいた。前述したように宗教施設の分布は常に商売、市場と関連している。商業、祭祀活動によって互いの交流が深められるからである。

また、図4が示しているように北部の西便門（V-12の2）から、宣武門西大街（V-12の2）、長椿街（V-12の3）、宣武門外大街（V-12の4）、和平門（V-12の5）までの一帯は寺院とは異

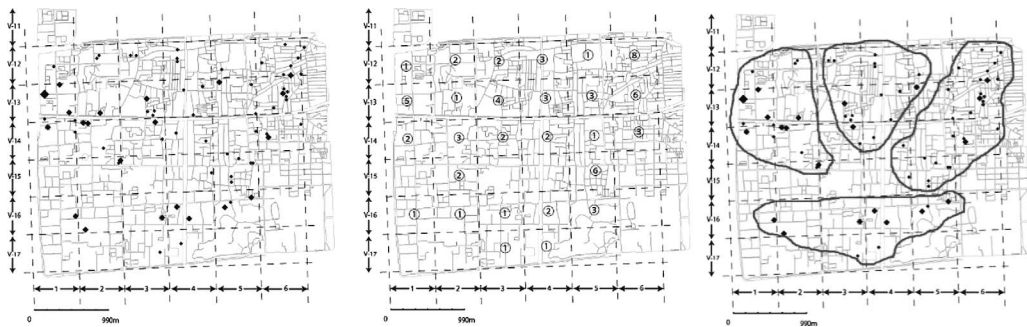


図4 宣武地域の庵の分布状況  
（筆者作図）

なり、小型庵のみが散在している。一方、西部の広安門 (V-13 の 1) から、広安門内大街 (V-13 の 2)、宣武門外大街 (V-13 の 4)、和平門 (V-13 の 5) までの一帯の幹線道路沿いに庵が分布している。また、驛馬市大街 (V-13 の 6)、和平門 (V-12 の 6) 一帯に庵が密集している。前述のように中軸線上にある前門大街は乾隆中期に北京城で最も賑やかな繁華街になっていた。店舗が林立し、商人、百姓が集まる場所であった。驛馬市大街 (V-13 の 6)、和平門 (V-12 の 6) 一帯は前門大街の西側の胡同の敷地に位置している。繁華街までの距離が近いので、ここに庵が密集していたと考えられる。V-13 エリアは宣武門外大街と菜市口大街の交差点の西側に位置している。このエリアには庵が数多く分布している。図 4 を参照すると庵は敷地の地割が錯綜している胡同に建てられている。狭い敷地には大型庵が建設できないため、中型庵、小型庵が数多く建てられている。また、V-12 エリアは宣武門外大街に位置している。ここは 3 軒の小型庵が街沿いに建ち並んでいる。

分布密度を見れば、南横東外 (V-15 の 5)、驛馬市大街 (V-13 の 6) が最も密度の高い地域である。2 番目は広安門 (V-13 の 1) である。表 1 に示しているように V-13 地域の庵総数は 17 軒、V-14 の庵総数は 20 軒である。図 4 を参照すると菜市口大街と宣武門外の交差点の西側地域 (V-13 の 3) の密度が高い。V-13 の庵の総数は V-14 に比べて少ないが、総面積は広い。V-13、14 地域にこれほどの庵が建設されている理由は幹線道路が東西を貫き、宣武地域の市街地の中心であるためだと思われる。また、崇文地域においても東西を貫いている幹線道路があるが、宣武地域の幹線道路と同じように両側に庵が密集していると推測される。これは崇文地域の地図上での分布状況を分析する時に判断できるだろう。

図 4 を参照すると、宣武地域の庵密度は以下の計算からその状況が把握できる。

東部の範囲 7 エリア、庵総数 28 軒、庵密度  $28/7=4$  軒/エリア

中北部の範囲 8 エリア、庵総数 17 軒、庵密度  $17/8=2.13$  軒/エリア

西部の範囲 7 エリア、庵総数 16 軒、庵密度  $16/7=2.29$  軒/エリア

南部の範囲 7 エリア、庵総数 10 軒、庵密度  $10/7=1.428$  軒/エリア

この数値からわかるように東部の庵密度が最も高い。次いで西部、中北部の順となり、最後は南部である。庵密度の計算によって宣武地域の庵の分布の特徴は東部、西部に密集しており、南部、北部の市街地には疎らに分布していることである。主に幹線道路沿いに分布している。重要な交差点には密集していないが、前門繁華街の西側の胡同に密集している。

### 3) 廟

各エリアにある廟 (▲) の数は図 5 に丸囲み番号で表している。民間信仰廟祠 (▲) は宣武地域の北部、中部に分布している。特に宣武門外大街 (V-13 の 4) と菜市口大街 (V-14 の 4) の交差点の西側、東側、南側の宣武門西大街 (V-13 の 3)、長椿街 (V-12 の 3)、宣武門外大街 (V-12 の 4)、和平門 (V-12 の 5)、菜市口大街 (V-14 の 3)、宣武門大街 (V-14 の 4)、珠市口西大街西側 (V-14 の 5)、驛馬市大街 (V-13 の 6)、珠市口西大街 (V-14 の 6)、菜市口大街南側 (V-15 の 5) 一帯に密集している。そして、宣武地域の西部の広安門内大街 (V-13 の 2)、宣武門外



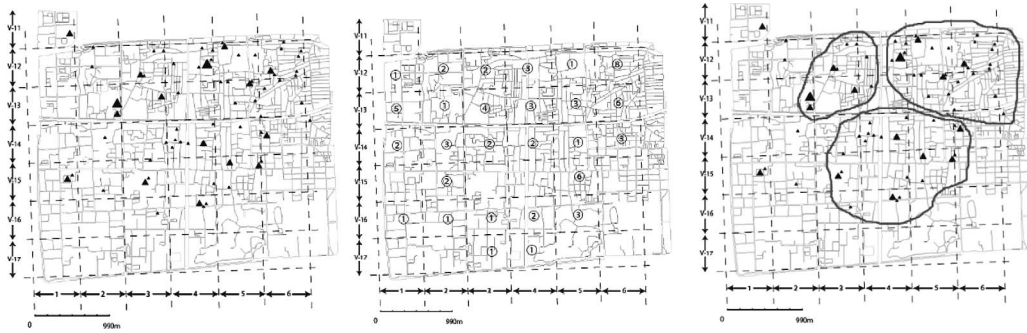


図5 宣武地域の民間信仰の廟の分布状況  
(筆者作図)

大街（V-12の4）に大型廟が建てられる。また、宣武地域の東部にある驛馬市大街、珠市口西大街（V-13の6、V-14の6）、西部にある広安門内大街（V-13の2）一帯、南部にある宣武門外大街（V-16の4）一帯に中型廟が建ち並んでいる。東部、中部、南部の胡同には小型廟が散在している。

分布状況を見ると、廟は37エリア中23エリアを占めている。占有率は62%と半分以上の地域をカバーしている。廟のほとんどが中部、北部に位置している。特に驛馬市大街（V-13の6）、和平門（V-12の6）に廟が密集している。表1が示すようにV-11、V-12、V-13、V-14、V-15のそれぞれの廟総数は1軒、21軒、13軒、14軒、11軒であり、総面積はV-11が1394m<sup>2</sup>で、以下、V-12が1763m<sup>2</sup>、V-13が14,378m<sup>2</sup>、V-14が13,517m<sup>2</sup>、V-15が9,008m<sup>2</sup>である。V-11地域には廟は1軒しかない、面積は最も広い。廟の数はV-12地域が最も多い。またV-16の平均面積が最も低いことがわかった。V-12、13、14、15の地域においては廟が密集している。V-13の2からV-13の6までの地域においては大型廟、中型廟、小型廟が建てられており、宣武地域における廟の本拠地と考えられている。また、幹線道路の南側に中型廟、小型廟が数多く位置している。

分布密度を見れば、東部の和平門（V-の6）、驛馬市大街（V-13の6）が最も密度の高い地域である。2番目は広安門内大街（V-13の2）一帯である。表1に示しているようにV-12地域の廟総数は21軒で、以下、V-13地域13軒、V-14地域14軒、V-15地域11軒となっている。図5を参照すると菜市口大街と宣武門外の交差点東側（V-13の5）の密度が高い。V-13の廟の総数はV-14に比べて少ないが、総面積は広い。V-13、14地域にこれほどの廟が建設されている理由は幹線道路が東西を貫き、宣武地域の市街地の中心であるためと考えられる。また、崇文地域においても東西を貫いている幹線道路があり、宣武地域の幹線道路と同じように両側に廟が密集していると推測される。これは後文の崇文地域の地図上で分布状況を分析する時に判断できるだろう。

図5を参照すると宣武地域の廟密度は以下の計算によってその状況を把握できる。

東部の範囲5エリア、廟総数27軒、廟密度  $27/5 = 5.4$  軒／エリア

西部の範囲5エリア, 廟総数9軒, 廟密度  $9/5=1.8$  軒/エリア

南部の範囲8エリア, 廟総数23軒, 廟密度  $23/8=2.875$  軒/エリア

東部の廟密度が最も高く, 次いで南部, 最後には西部となっている。廟密度の計算によって宣武地域の廟の分布の特徴は菜市口大街, 宣武門外大街の交差点周りの東部, 西部, 南部に密集しており, 西部の市街地においては疎らに分布する。幹線道路の重要な交差点も密集している。

#### 4) 観, 儒教廟, 清真寺

各エリアにある道教観 (●), 儒教廟 (☆), 清真寺 (☉) の数は図6に丸囲み番号で表している。道教観は宣武地域の和平門 (V-12の5) に1軒, 宣武門西大街 (V-13の3) に1軒, 白紙坊西街, 陶然亭路 (V-16の3, 5) に2軒分布している。儒教廟は全部東南部の山川壇にある。清真寺は牛街 (V-14の3) に2軒ある。特に儒教廟は乾隆時代に皇帝が豊年を祈るために祭祀を行う場所であった。乾隆帝はここで農耕生活を擬似体験し, 土地に自ら敬意をささげ, 農業を重視している皇帝の姿を天下の臣民に示していた。前述のように宣武地域は多くの民族が雑居している多信仰の地域であった。牛街は回族の居住地であるため, ムスリムの食堂が多い。北京において面積が最も広い牛街清真寺がここに位置している。現在の北京でも, 牛街一帯は回族が居住している独特な地域である。また, 図6を参照すると東北部の和平門一帯は前述のように前門大街の西側に位置している。敷地の地割が狭く錯綜している。乾隆時代, この地域に清真寺が建設されていた。これによって前門大街の西側に回族が居住していることがわかる。

最後に, 道教観であるが, 道教の大型観と中型観3軒が南部の市街地の境に散在している。観は市街地の辺縁に位置しているため, 住民は少ないが, 敷地の面積は広い。上述の道教観, 儒教廟, イスラム教の清真寺は全部胡同に位置している。一方, 寺, 庵, 廟はほとんど幹線道路, 繁華街に沿って建設されている。その理由を考えると儒教廟を除き寺, 庵, 廟に比べて, 観, 清真寺の宗教勢力が弱いことが挙げられる。また, 宣武地域における信仰の傾向として, 道教に比べて仏教, 民間信仰の方が人気があったと考えられている。

分布状況を見ると観, 儒教廟, 清真寺は37エリア中9エリアを占めている。占有率は24.3%で4分の1未満の地域をカバーしている。図6が示しているように儒教建築は東南部に密集して

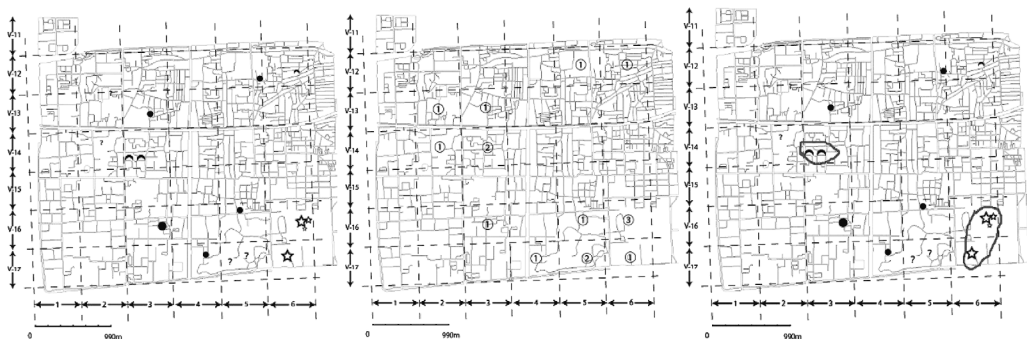


図6 宣武地域の観, 廟 (儒教), 清真寺の分布状況 (筆者作図)

おり、分布範囲が最も狭い。清真寺は牛街の回族居住区、和平門周辺の胡同に位置している。分布範囲は2エリアに限定されている。道教観は市街地の南部の境、和平門一帯、広安門内大街北側の胡同に分布している。分布範囲は5エリアをカバーしており、道教観の分布範囲が最も広くなっている。

分布密度を見れば、儒教廟が最も高く、次いで清真寺、道教観となっている。表1を参照すると宣武地域の儒教廟の総数は4軒、総面積68,172m<sup>2</sup>、平均面積17,043m<sup>2</sup>である。清真寺の総数は3軒、総面積は17,790m<sup>2</sup>、平均面積は5,930m<sup>2</sup>である。道教観の総数は5軒、総面積16,871m<sup>2</sup>、平均面積3,374m<sup>2</sup>である。道教観の数が最も多いが、平均面積は最も狭い。一方、儒教建築の平均面積が最も広い。清真寺は平均的な数値をとっている。

図6を参照すると宣武地域の儒教廟、清真寺、道教観の密度は以下の計算によってその状況を把握できる。

儒教廟の範囲2エリア、廟総数4軒、廟密度 $4/2=2$ 軒/エリア

清真寺の範囲2エリア、寺総数3軒、寺密度 $3/2=1.5$ 軒/エリア

道教観の範囲5エリア、観総数5軒、観密度 $5/5=1$ /エリア

東南部の儒教廟の密度が最も高い。次いで清真寺、道教観の順である。

### III おわりに

本稿では、IIの1で宣武地域の位置づけに言及し、乾隆時代の北京の宣武地域全体的な宗教環境及び宗教施設の分布状況を説明した。次にIIの2で、『乾隆図』の仏教寺院、仏教庵、民間信仰廟、道教観、儒教廟、イスラム教清真寺の分布状況を分析し、宣武地域を事例としての各種の宗教施設の景観の対照を試みた。最後に、宗教施設の分布の特徴の形成の理由を考察した。

乾隆時代、北京の宣武地域では、儒教廟宇は数少なかったが、他の宗教施設より敷地の面積ははるかに超えている。また、儒教廟宇は北京の中軸線の南端に建設されたことが明らかになった。そして、仏教寺院のほとんどは重要な道路に沿って建築されていた。数では最も多い庵であるため、居住区の街中（胡同）に散在する傾向が強い。宣武地域の宗教施設の平均面積は、儒教廟宇が17,043m<sup>2</sup>、イスラム教清真寺が5,930m<sup>2</sup>、仏教寺院が5,175m<sup>2</sup>、道教宮観が3,374m<sup>2</sup>、仏教庵が988m<sup>2</sup>と民間廟祠が909m<sup>2</sup>の順に小さくなることが明らかになった（表1）。

過去の北京城に対する研究は、主に都市計画、空間構造、及び建築様式について注目してきた。前二者の研究は都市全体を論じるものであるが、建築様式の研究については個々の建築に対して論じられている。そして、北京城の『歴史地理地図集』は1980年代には刊行されていたが、未だそれを用いた分析は十分ではない。

本稿では、北京城内の『乾隆図』に描かれた宣武地域における宗教施設を『北京古建築地図集』（2009）の基図上に落として、宗教別に建築群の分布と面積を整理した。これは、各宗教信仰の普及程度と深い関係があると考えられる。

表1 清乾隆中期 (1750年) 北京外城宣武地域の宗教施設の分類と面積

グリッド	グリッド内廟数	仏教寺廟		仏教庵		民間廟祠		儒教廟宇		道教宮觀		イスラム教清真寺	
		名称	寺数 面積 (m <sup>2</sup> )	名称	庵数 面積 (m <sup>2</sup> )	名称	廟、祠数 面積 (m <sup>2</sup> )	名称	廟宇数 面積 (m <sup>2</sup> )	名称	宮觀数 面積 (m <sup>2</sup> )	名称	寺数 面積 (m <sup>2</sup> )
V-11	1	なし	0	なし	0	関帝廟	1 廟祠 1394	なし	0	なし	0	なし	0
V-12	48	紫金寺、竹林寺、接待寺、永光寺、観音堂、延寿寺、延寿寺、観音寺	8 寺 23,258	弥陀庵、吉祥庵、大從庵、軒轅庵、孔雀庵、地蔵庵、三義庵、朝慶庵、松筠庵、地蔵庵、三元庵、地蔵庵、五聖庵、五聖庵、福德庵、抬頭庵、三聖庵	17 庵 7,330	五道廟、七聖廟、靈觀廟、三忠祠、三廟、土地廟、灶君廟、関帝廟、廟、関帝廟、龍王廟、廟、関帝廟、廟、廟、真武廟、関帝廟、太歲廟、大弘廟、火神廟、真武廟	21 廟祠 17,663	なし	0	仁威觀	1 觀 3,113	礼拝寺	1 寺 1,779
V-13	39	婦義寺、妙喜寺、善国寺、長寿寺、広華寺、円通寺、万仏寺、給孤寺	8 寺 65,586	松林庵、慈濟庵、□月□(水月庵)、白衣庵、白衣庵、三聖庵、天仙庵、白衣庵、永興庵、五聖庵、清風庵、観音庵、延寿庵、準提庵、玉極庵、□□庵、観音庵	17 庵 22,185	廟官閣(三官廟)、真武廟、関帝廟、関帝廟、鉄老觀廟、関帝廟、玉皇廟、五聖廟、五道廟、火神廟、貴子廟、火神廟、馬神廟	13 廟祠 14,378	なし	0	玉虛觀	1 觀 2,372	なし	0
V-14	47	宝応寺、聖恵寺、増寿寺、小寺、報国寺、保安寺、崇興寺、響鼓寺、万明寺、華嚴寺、仁寿寺	11 寺 49,961	広寧庵、三聖庵、韋馱庵、聖教庵、宏玄庵、白衣庵、宗境庵、華嚴庵、観音庵、娥媚院、浄土庵、太平庵、福德庵、水月庵、伏魔庵、白衣庵、観音庵、三元庵、地蔵庵、五聖庵	20 庵 20,870	東岳廟、土地廟、水神廟、七聖祠、馬王廟、城隍廟、伏魔廟、小廟、伏魔廟、玉皇廟、土地廟、灶君廟、関帝廟、靈觀廟	14 廟祠 13,517	なし	0	老君地	0	礼拝寺、礼拝寺	2 寺 16,011
V-15	28	千仏寺、曇花寺、崇効寺、法源寺、聖安寺、千仏寺、弘福寺、通法寺	8 寺 46,492	乾静庵、伏魔庵、椅子庵、弥陀庵、三聖庵、清慈庵、三聖庵、三元庵、三聖庵	9 庵 6,601	救苦廟、三官廟、真武廟、景忠廟、白馬廟、火神廟、関帝廟、葉王廟、関帝廟、龍王廟、三聖廟	11 廟祠 9,008	なし	0	なし	0	なし	0
V-16	18	龍泉寺	1 寺 5,545	三聖庵、永護庵、天仙庵、延慶庵、松柏庵、毘盧庵、伏魔庵、七聖庵	8 庵 13,935	龍王廟、三觀廟、財神廟、土地廟	4 廟祠 2,225	太歳殿、旗寿殿、居服殿	3 廟宇 18,680	弘仁万寿宮、□清觀(三清觀)	2 宮觀 9,073	なし	0
V-17	5	興林寺	1 寺 623	三義庵、観音庵	2 庵 1222	なし	0	神祇壇	1 廟宇 49492	大清觀	1 宮觀 2313	なし	0
合計			37 寺 191,465		73 庵 72,143		64 廟祠 58,185		4 廟宇 68,172		5 宮觀 16,871		3 寺 17,790
廟平均面積 m <sup>2</sup>			5,175		988		909		17,043		3,374		5,930

グリッド V-11～V-17

V-11 (西～東) 西便門

V-12 (西～東) 西便門、宣武門西大街、長椿街、宣武門外大街、宣武門、和平門

V-13 (西～東) 広安門、広安門内大街、宣武門外大街、驛馬市大街

V-14 (西～東) 牛街、菜市口大街、宣武門大街、珠市口西大街

V-15 (西～東) 藁林前街、右安門内大街、南横西街、菜市口大街、南横東街、北緯路

V-16 (西～東) 広安門南街、南菜市街、白紙坊西街、右安門内大街、宣武門外大街、陶然亭路、太平街、天橋

V-17 (西～東) 右安門、右安門濱河路、右安門東街、永定門西街

## 付記

野間晴雄教授はわたくしの博士論文の指導教員であり、恩師でもあります。先生がいなければ順調に博士号を取ることはできませんでした。今現在大学の講師になるのも先生のご指導のおかげだと思っております。今思えば、2016、17年に野間先生のご親切な指導のもとで人文地理学会での発表の光景が思い浮かべております。まるで昨日のことで感無量でございます。わたくしは留学する際にわがままや落ち込んでいた時期がありました。野間先生は大目に見てくださって、ほんとうに感動いたしました。先生のご鞭撻とご指導がなければこれからわたくしの人生はどうなるのでしょうかが分かりません。野間先生はわたくしを人文地理学と歴史地理学に関わる学術的人生に導いていた偉い恩師です。古稀を迎える際に先生これからのご健康や安寧をお祈り申し上げます。

## 注

- 1) 牟鐘鑒「試論民族的宗教性和宗教的民族性」『中国宗教』, 第1期, 2006, 14.
- 2) 文化庁ホームページによる定義では、「建造物、工芸品、彫刻、書跡、典籍、古文書、考古資料、歴史資料などの有形の文化的所産で、我が国にとって歴史上、芸術上、学術上価値の高いものを総称して「有形文化財」とする。歴史建造物（宗教施設）は有形の文化的所産に該当する。
- 3) 『史泉』第122号2015, 34-48.

## 文献

日本語文献（五十音順）

1. 今西春秋（1940）. 『乾隆京城全図』解説.
2. 北本朝展, 貴志俊彦, 西村陽子（2013-2015）. 『乾隆京城全図』と空間画像史料を用いた「華北・北京歴史データベース」の構築.
3. 布野修司（2015）. 『大元都市－中国都城の理念と空間構造』京都大学学術出版会.
4. 伊原弘（1996）. 『古代建築研究所・北京市文物事業管理局資料中心編新版『乾隆京城全図』について（上下）』東方書店.
5. 陣内秀信・朱自煊・高村雅彦（1998）. 『北京－都市空間を読む』鹿島出版会.
6. 船越昭生（1985）. 中国の歴史的都市－北京, 講座考古地理学, 歴史的都市, 3178-200.
7. 鄧突, 布野修司, 重村力（2004）. 『乾隆京城全図』（1750）にみる居住単位に関する考察, 『日本建築学会計画系論文集』, 582.
8. 鄧突, 布野修司, 重村力（2000）. 『乾隆京城全図』にみる北京内城の街区構成と宅地分割に関する考察, 『日本建築学会計画系論文集』, 536.
9. 鄧突, 布野修司, 重村力（2001）. 北京内城における寺廟の分布に関する研究, 『日本建築学大会学術講演概集（関東）』.

中国語文献（ピンイン順）

1. 『乾隆京城全図』（1940）. 興亜院華北連絡部政務局調査所編.
2. 牟鐘鑒（2006）. 試論民族的宗教性和宗教的民族性, 中国宗教, 1.
3. 鄧突, 毛其智（2004）. 北京旧城社区形態構成的量化分析－対『乾隆京城全図』の解説, 城市規劃, 5.
4. 鄧突, 毛其智（2003）. 従『乾隆京城全図』看北京城街区構成与尺度分析, 城市規劃, 10.
5. 李菁, 王貴祥（2006）. 清代北京城内的胡同与合院住宅－対「加模乾隆京城全図」中「六排三」与「八排十」の研究, 世界建築導報, 7.
6. 李菁（2009）. 『乾隆京城全図』中の合院建築和街坊系統研究（中文訳稿）, 建築歴史与理論（首届中国建築史学全国青年学者優秀学術論文標選獲獎論文集）, 10.
7. 賈琚（2009）. 『北京四合院』清華大学出版社.
8. 侯仁之, 嶽昇陽（2008）. 『北京宣南歴史地図集』学苑出版社.
9. 侯仁之（2014）. 『北平歴史地理』外語教学与研究出版社.

10. 侯仁之 (2013). 『北京歴史地図集』北京出版社.
11. 胡介中・李菁・李路珂・王南 (2012). 『北京古建築地図』清華大学出版社.
12. 胡介中・李路珂・李菁・王南 (2009). 『北京古建築地図集』(上) 清華大学出版社.
13. 邱凡 (2016). 北京清代親王府建築空間形態研究 (修士論文), 北京建築大学, 分類号 **TU09**.
14. 孫果清 (2011). 『乾隆京城全図』.
15. 周家楣, 繆荃孫 (1886). 『光緒順天府志』(1987 版) 北京古籍出版社.
16. 張旭 (2015). 清代乾隆時代北京崇文区の宗教施設の分布と景観-「乾隆京城全図」の分析から-, 史泉, **122**.
17. 張旭 (2016). 書評: 宗緒盛『老北京地図的記憶』(2014), 人文地理, **68**(1), 96-97.
18. 朱淑媛, 劉若芳 (2007). 乾隆『京城全図』概述.
19. 宗緒盛 (2014). 『老北京地図的記憶』中国地図出版.
20. 曹宗儒 (1935). 清内府藏京城全図年代考, 文献特刊, 故宫博物院文献館出版.
21. 陽乃濟 (1984). 『乾隆京城全図』考略, 故宫博物院院刊, **3**.
22. 吳良墉 (2009). 『中国建築与城市文化』崑崙出版社.
23. 王魯民, 宋鳴笛 (2012). 合院住宅在北京的使用与流布-從乾隆『京城全図』説起, 南方建築, **4**.

## Historical Study on the Distribution of Religions Facilities in the Senbu Area in the Qianlong Qing Dynasty: An Analysis of Qianlong Complete Map of Beijing

ZHANG Xu\*

Religion is the ideological belief of mankind and the spiritual culture. Over the years, people's desires and longings for life have become diverse beliefs, and finally religions. The so-called religion is an intangible spiritual culture to which people's hopes are entrusted. On the other hand, with the exception of Buddhist sutras, scriptures, Buddhist statues, and divine images, temples, shrines, shrines, views, mausoleums, and churches built in various places can be said to be tangible things that embody religion. Therefore, it is no exaggeration to say that religious facilities are not only places to entrust faith, but also important facilities for passing on the history and culture of cities and regions to future generations. In this paper, I would like to analyze the distribution and landscape of religious facilities in the Beijing Xuanwu area of China using the "Complete Map of Qianlong Jingcheng".

**Key words:** Beijing Xuanwu area, Religious facilities, Distribution Cityscape, "Qianlong Jingcheng Overview"

---

\*Instructor of Japanese Institute, Beijing International Studies University  
E-mail : beijingabyss@163.com